

New Principles of Economy ——(2)

Yaroku Kobayashi

第六章 宇宙・地球・人間本性論

さてつぎに、宇宙・地球・ヒトについて述べることにしよう。すでに述べたように、これまでの経済学あるいは社会科学はこの世界観ないしは存在論をさして考慮せぬままに研究され、形成されたものが多かった。そのために本来注意すべきものが注意されなかったことが少なからずある。

まず地球とヒト（人間・人類）から考えてみよう。

地球は、太陽系の中の一惑星であり、球形の水惑星であり、地球は、生物とくに動物や鳥類などのような、非常に発達した有機体が生存することをゆるす条件をたまたま具備した惑星であるといわれる。

海洋・河川など水が非常に多量にあり、さらに大気の膜が地球を包んでおり、この中には酸素(O)や窒素(N)など、動物や植物の生存にとって必要な分子がある。またオゾン層が破壊力ある無数の宇宙線から人類や他の諸生物

を守っている。陸地があり土壌や岩石がある。各種の金属も内蔵され、かつ内部にはマグマがあり、その結果地熱があり温泉も出る。

地球は太陽の回りを公転しかつ自転もしている。その結果、太陽からの巨大な光のエネルギーを受容することが可能になっている。その結果、海水・河川・地表ないし地下水が水蒸気になり雲になり雨や雪になって落下するという水の循環も可能になっている。もちろん引力があつて生物やその他の諸物が地表に附着できる状態になっている。

太陽系の一惑星である地球がこのように生命の発生と生存を可能にする数多の条件を具備していることは、あえて記すまでもないが、造化の妙という感を深くする。

それに私共だれもが体験しているように地球は、あるいは自然は譬えようがない位に美しい。このことが何故かをもう一度考える必要がある。また人類は生存をゆるさされているだけでなく、その美しさにいかに感嘆し心なぐさめられ美への限りなき魅れをかきたてられていることか。日本流にいえば、山水、花鳥風月の美しさは譬えようがない。人類にもそれを美しいと感じる感性ないしは心性が具わつており、そこから芸術や文化も生じる。

銀河系はガス状の状態から星雲状になり、一千億個という恒星の中の一つとして太陽（巨大な核融合反応）が誕生し、おそらくはその太陽から地球が子惑星として飛び出し誕生したのだろう。地球は体積では太陽の百三十萬分の一の小さなもので、足立達夫博士によると太陽をフットボールのボールとすると地球は丸薬位の大きさだという。

そして、この地球ははじめの灼熱の状態からしだいに表面が冷え地殻ができる。そこに水分（ H_2O ）が生じる。いかなる契機で発生したのか一種不思議な気もするが、ともかく大量の水が発生して地球の表面に巨大な海洋が出来た。それが地球上に生物が発生し、繁茂、繁殖する土台になった。まず海中にバクテリア（一〇億分の一インチの細胞

をもつ初めての生命体)が発生し、しだいに海藻が発生繁茂するようになった。それは光合成活動をして酸素を作り出していった。この場合に太陽光線(エネルギー)が決定的に重要な補佐役になったことはいうまでもない。ついで陸上にコケ類をはじめとして植物が発生し、炭酸同化作用をおこない永い年月をかけて大気を作りあげた。その結果、地球には大気圏の皮膜が生じ生物が棲めるような環境ができた。

バクテリアからプランクトン(光合成をおこなう)、魚貝類などはじめは海中に生物が発生し、ついで両棲類が発生し、生物はしだいに陸上にあがって生活するようになる。ついで爬虫類・鳥類・哺乳類・霊長類・人類の順に生物が現われたといわれている。ともかく次第に複雑な構造をもち知能も発達した生物が発生するようになった。

単細胞のバクテリアの大腸菌からはじまって、プランクトンから六百兆の細胞から成り立つといわれる人類まで、生物はしだいに複雑・精巧な仕組みの有機的生命体に進化をとげている。バクテリアから多細胞生物が現われるまでに三十億年かかり、今から七億年前に多細胞生物が発生し、動物に至っては無数の細胞の精緻な組み合わせで臓器ができ、また臓器と臓器との役割分担とそれらの連結によって生命が維持されている。

人間についてもそれが極めて精緻な構造にできていることは広く知られている。胃壁の例をとってみると、無数の細胞が巧みに組みあわされており、胃炎などで疾患があらわれるとこれを修復するはたらきをする細胞もある。つまり臓器は修理機つきの巨大な装置なのだ。もともと一つの細胞が生きているについても、内部と環境との間で複雑きわまりない化学反応がおこなわれている。細胞はその一つ一つが、巨大な化学工場であり、その化学反応がおこなわれることで、細胞はいわばつねに死にかつ更新されている。人体全体についても、細胞はつねに死に、更新されることによって、生きつづけているといえよう。

地球上にかつて生息した生物でマンモスや恐竜のように絶滅したものは多い。しかし現代でも無数といえるほどの植物や生物が地球上に生存しており、それらのあいだには食物連鎖などの精巧な相互補足関係が成り立っており、しかも海水や大気圏や土壌など諸生物（動植物）が生存する生物圏（バイオスフィア）が維持されている。この生物圏の中で諸生物が生存しており、全体として生態系が成り立っている。

このように地球上に生物圏ができ、無数の動植物が発生し、たがいに関連しあつて生存していること自体、なんとも不思議である。これらを科学的に研究すれば研究するほど不思議な気がするのである。

大気圏の酸素・炭酸ガス・窒素の割合が一定比率に保たれるとか、前述のような複雑な仕組みや装置をもつ生物が発生していることをとつても、そこになんらかの意志や設計があるとみたほうが、むしろ納得がいく感が深い。地球はたんなる無機質の集合体というよりは、むしろ自己調整力ある生命体ではないか、という「ガイヤ仮説」（ラブロツク）が生まれてくるゆえんでもある。地球という宇宙の中のまことに小さく、しかし美しくできた水惑星の上に私共人類が今日生き、経済活動をおこない、政治・社会・科学・文化活動をおこなっているのも、叙上のような太陽系と地球と地球上の生物圏・生態系の絶妙な連鎖に支えられてはじめて可能になっている。

このことを経済学をはじめとする社会科学も、人文科学も、人間が社会生活の中で実行している科学技術の研究と応用のフィールドにおいても強く銘記し、ゆめゆめ忘れてはならぬだろう。端的にいえば、太陽の光線や森林原野や海藻などの緑葉植物がおこなう光合成・炭酸同化作用の恩恵なしに、人類は生きられない。マイ・カーを作り乗りまわすことも、コンピューターを作ること、モダンな建築物を作るとか、快適な都市生活を送ることもできない。会社も政府も国会も学校・病院・研究所も存在しない。国会も選挙も野球リーグ戦もオリンピック大会もすべて消えて

しまう。

すべては、地の恵み・天の恵みがあつてあることである。

ところで、経済学は従来、有限な資源（土地・労働・資本）のみを重視する傾向があつた。スミスもマルクスもケインズもかなり単純に大気や水は無限であると考えたようだ。そして経済学は「稀少」なものだけを考慮すればよいと考えた。自然の恩恵はあるが、さしあたり考慮しなくてよく、リカードその他が考えたように、せいぜい土地の有限性（優等条件の土地には限りがある）を考える程度で、有名な収獲通減法則が唱えられた。新古典派も「稀少な資源」、稀少な生産用役（資本・労働・土地）を計算に入れてはにすぎない。

今、私達にとって発想転換を要するのは、水も大気も土壌も他の植物・生物もそして太陽光さえも決して無限ではないということだ。企業が生産活動をおこない、消費者に対して供給するにしても、これらの環境や生態系との交流を通じておこなわれないものは何一つない。消費生活についても、マイ・カーを高速道路その他を乗り回し、マイ・ホームを造り暖房したりバス・ルームを作り利用したりするにしても、多量のエネルギー・資財を要し農地を宅地に変えるとか、おびただし排気ガスや騒音を広範に撒き散らすなど、環境・生態系という稀少資源、いわば「自然資本」(natural capital) を使用し消耗させながらおこなつてゐる。

工業化社会で経済活動をおこなうということは、このように地球・環境資源を消費することになり、その多くがエントロピー増大というかたちで復元困難なのだ。

現代の企業や個人・家族（家計）の活動はこの「外部不経済ともいうべきコスト（費用）」を殆ど無視して、いわば極めて無軌道に実行されており、人類の前途に赤信号が点滅するまでになつてゐる。

「資源の消費の増加にともなう環境に与える悪影響が強まったことは、過去の経済成長の当然の結果であった。エントロピーの法則は経済成長の結果、環境がすでに耐えられないほどの廃棄物が排出されたことを宣告しているのである。」(ポール・エキンズ 石見尚・中村尚司・丸山茂樹・森田邦彦 『生命系の経済学』七頁)

現代の資本主義ないしは工業文明は、新古典派総合などの資本主義経済学が公衆を教化しているようには、決して合理的な社会・経済システムではない。東側の共産主義体制が崩れつつある今、私共はあらためてこのことを自覚しなければならぬ。資本主義は勝利したように見えるけれど決して勝利したわけではない。わかり易く表現すればこのまま百年以上も人類の資本主義が地球上で続くとは、いかに科学技術の進歩による緩和作用があるにしても到底考えられない。早晚、地球は自己調整力を失い人類によって砂漠化されてしまうだろう。

「わたしの祈り

わたしたちの世界は、すでにご存じのように、急速に終わりへと向かいつつあります。いまだにそのことを信じられなかったり、知っても認めたがらない人たちがいますが、賢明な人は、間違いなく真実であることを知っています。いずれ今後一〇年から二〇年ぐらゐの間に、全人類がこの真実を知ることになるでしょう。

人間の歴史のなかで、現代ほどユニークな瞬間はありません。なんとなく、わかるような気がしませんか？ あなただって、そう感じているでしょう？ わたしたちは今、かまやう剃刀の刃の上に立たされているのです。ギリギリのエッジのうえに、危なっかしく、もはやどんな決断でも簡単にはくたせないし、いっきしゅいっしゅ一気手一投足にすらミスが許されません」(『OH

Home 我が家』シム・シメール画集 小学館)

新古典派経済学やマネタリストや日米欧の諸国の特権層や各種のメディアが日夜、教化に努めているのとは異なっ

て、現在の政経システムは決して合理的なわけではない。

それは利権追求オンリーの原理に立つ、「万人の万人に対する闘争」（ホッブス）のモラル面で倒錯した社会である。人類が自己の物的利益の利己的な追求を重視し、これを原理にするという誤った価値観や人生観を一般的に採用している、人類史上でもきわめて奇型的な文化なのだ。

その変則性が植民地化や戦争や階層差を生み出し、第二次大戦後はケインズ主義によってかたつてない長期的な高成長を達成した。それは主に技術革新と資本蓄積と政策的な助成によるが、それはまた、蓄財への盲目的な信仰や経済成長の高率なのが良いことだという誤った信仰を生み出した。また人々はその信仰にドップリ身を浸しているほかに、それが人生を価値多く幸せに生きたことだという誤った哲学を一般に普及させた。

旧ソ連・東欧も中進国途上国も、日米欧などの上記の風潮に右へならえしており、人口は二〇一〇年には六〇億人、二〇二五年には八五億人に増加するとの推定もある。このような膨大な人口が、高度の消費社会・物質文明をふんだんに享樂しようとするのが、地球の環境や資源からいってもと無理である。わかりやすく表現すると、地球の容量（パイ）を超えてしまい、地球を汚し削り、その自己再生産能力を傷つけ、バランスを崩してしまう可能性大なのだ。すでに大気の汚染や温暖化、気象異変、オゾン層の破壊が深刻な度合で進行しており、現代の人類の日常の行為は「ガイア仮説」が説くような生命あるといえるかもしれぬ地球を怒らせる、神を恐れぬ行為なのだ。

人間が自らの何たるかを忘却したことからくる、限りなくはなはだしい愚行なのだ。
人間とは何か。

地球が太陽を回る軌道が現在からほんの少しだけズレても人類は地球上に住めない。地軸が少しだけシフトしても

大打撃を蒙るといふ。地球上に人類が、そして私達一人、一人が生存をゆるぎされているということが大宇宙と物理学・生化学などの目から見て、およそ常識では考えられぬ何兆分の一という当り籤くじをひきあてている結果なのである。そこに私共はむしろ創造主という究極の偉大なる存在を考え、肯定したほうが間違いが少いとさえいつてよいだろう。このことについてはのちに触れる。ダーウィンの進化論のように生物の進化を自然的なプロセスと考えて計算すると、生物が発生してから今日までの年月では進化はどうしても不可能なのだと言学者はいうという。

さて人類学によると、人間（ヒト）の歴史は百五十万年あるという。霊長類と同じようにヒトははじめ樹上生活をしていた模様である。それがあつた時から地上に降りて生活するようになる。

ヒトの特徴はまず二本足の歩行つまり足で地に立つて歩くことを始めたことからはじまる。この直立歩行がどうやらヒトをヒトらしくしたらしい。ここから人間は手を器用に使うことができるようになった。つまり手が足でなくなつた。

直立二本足歩行は頭の部分の負担を少くし大脳の発達を助けたともいわれる。ちなみに人間の脳皮質はなんと百十億の神経細胞から成り立っているとされ、前脳の1/12の中に二七万種類の伝達系統が入っているという。最高度にすばらしいコンピューターが人間には備えつけられている。

直立歩行、手の利用、脳髓の発達が霊長類と他の動物とを大きく分けることになった。人間には記憶力や複雑な判断力があり、また前頭葉の発達にもとづいて企画力や創造力がある^(註)。

動物として身体をもち、身体が高度な発達を上げていることは上記の通りだ。ただしこの人間機械論的な認識のレベルにとどまっています。私達は人間が高度に発達した生物であることはわかっても、それ以上のことを理解しておらず、「人間本性」を理解していないことになる。近代・現代の社会科学また経済学は、この認識を欠落しているところに根元的な欠陥がある。

それらの学問は人間がたんなる動物であり肉體であり、物質であるに過ぎないと暗々裡にか、あるいはマルクス主義のように明示的に考えてきた。おそらくこのアトム論的人間観の上に立って、社会学も経済学も政治学も心理学も歴史学も自然科学も組み立てられてきた。ところが、その方法論の限界が現在世界のあちらこちらで意識され説かれ始めている。

人間は身体としての肉体的存在としての一元的存在であるといえるか、心とか精神を肉體に発するものと割り切れるかどうか、この点が重大な問題なのである。すべての学問にとつて、社会科学・人文科学・自然科学で、当面の問題にひきつけて経済学を考えるばあいに、この根本的な問題を避けて、真理の認識に至るのはじつは誠に難しい。

新古典派経済学や古典派経済学は人間を一資源（労働）と考えている。人間を肉體・人間・物質だと考える。さらにそれらが労働以外の他の人間生存・人間生活あるいは人間の営みをめぐるさまざまな価値観ないし価値判断を切り捨ててしまう方向に今日までまっしぐらに歩んできたところに大きな誤ちが犯されている^註。

註 ガルブレイス、ポールディング、宇沢弘文らが指摘するように、近代の資本主義経済学の欠陥は価値観を排除していることである。別の角度からいえば、効率性や成長至上の価値観をとっており、人間性にそくした価値観を欠落ないし排斥している点にある。没価値

性の経済学は誤りなのである。すすんでいえば宇宙論的な価値観と価値論にもとづく経済学こそが今はもとめられている。

のちに経済理論にそくして詳しく述べるが、人間は優れて文化的な存在である。ヒトに尽きるものでなく、もちろん霊長類ひいては哺乳類とも違う。たんなる労働機械いわば労働ロボットとは違う。奴隷ではなくもちろん家畜でもない。

現代の資本主義経済学は労働する人間を労働（生産用役）・労働用役（L）にとらえ、土地用役や資本用役とならぶ生産要素と規定する。また、労働用役を供給する家計（勤労者）は市場での選択において効用・満足の大化をめざすという。つまり効用大化が疑問の余地がない消費行動だと教義化し、教えている。消費者をいわば欲望ロボットだと教え、そのように想定して経済の理論化をおこなっている。

人間が「労働ロボット」と「欲望ロボット」として振舞うことが合理的な経済行為であり、その公準の上に多種多様な経済活動が生み出されると主張している。勤労者は欲望ロボットだから欲望をみたく収入を得るために、労働市場で企業家と契約する。その収入で欲望ロボットとしていわゆる無差別曲線（等効用組み合わせ曲線）に沿って効用大化するように商品を選択し、需要・購入する。これが市場行動の理論である。教えられるところも多いのだが、全体的には心情・心性も血も涙もない、また唯物論の乾いた経済理論であることは確かだ。この意味で、新古典派・ケインズ経済学・マネタリズム等の生産用役・家計・市場行動理論については、のちに詳述するように、シャイロック型の欲望と貧欲の乱舞の合理化と推奨の罪が含まれているともいえるだろう。

現代の「経済学批判」を通じてこの点を見抜き批判し克服しないと、人類はやがて貪欲の業火に身を焼かれてしま

う。地球を砂漠化し自滅してしまふ。

物的欲望の貧欲な追求や快樂追求・資源や環境の濫費・破壊型の経済成長で突き進んでよいのだ、これで私達はますます豊かになり富も増え、幸せになれるのだ。——このような快樂至上、物質至上、奢侈贅沢のすすめ、贅沢と浪費をつうじて貧欲に金（貨幣）と物質的富を利己的に追求する文化やイデオロギーは、人類が自らの首を自らの手で絞める教義でしかないのだ。

「殷王受、号為紂。資弁捷疾、手二格猛獸一。智足二以拒諫、言足二以飾非。始為二象箸一。箕子歎曰、「彼為二象箸一。必不三盛以二土簞一。將レ為二玉杯一。玉杯・象箸、必不下羹二藜藿一、衣二知褐一、而舍中茆茨之下。則錦衣九重、高台廣室、称レ此以来、天下不レ足矣。」（『十八史略』）

通釈 殷王の受は、人が呼んで紂と言った。生まれつき能弁で動作はすばやく、猛獸を素手で捕えるほどであった。紂は始めて象牙のはしを作った。（おじの）箕子はこれを見てなげいて言った。「あの紂は象牙のはしを作った。とすればこれからは、必ず粗末なかわらけには食物を盛りはすまい。きっと（はしにふさわしい玉製の杯を作るだろう。玉杯や象箸を使うようになれば、きつと（今までのようには）あかざや豆の葉のスープを食べたり、そまつな短い服を着て、かやぶきの屋根の下に住まなくなるだろう。そして錦の衣をいく重にも重ね、高い楼台を築き、広い堂宇を建て、すべてをこのようない沢な生活につりあうようにしようとするれば、天下中の富を集めてみたところで、足りるはずはありはしまい。」と。（加藤道理『十八史略・史記新解』新塔社）

質素は美德なのである。自然とあい和して暮らすのは美德である。中国古代の聖王と伝えられる帝堯は『十八史略』によると、「茆茨不レ翦、土階三等。有レ革生レ庭。」と記される。つまり、「その宮殿はかやぶき屋根の端を切りそろえ

もせず、土の階段がわずかに三段だけというそまつなものであった」（同右書、九頁）。

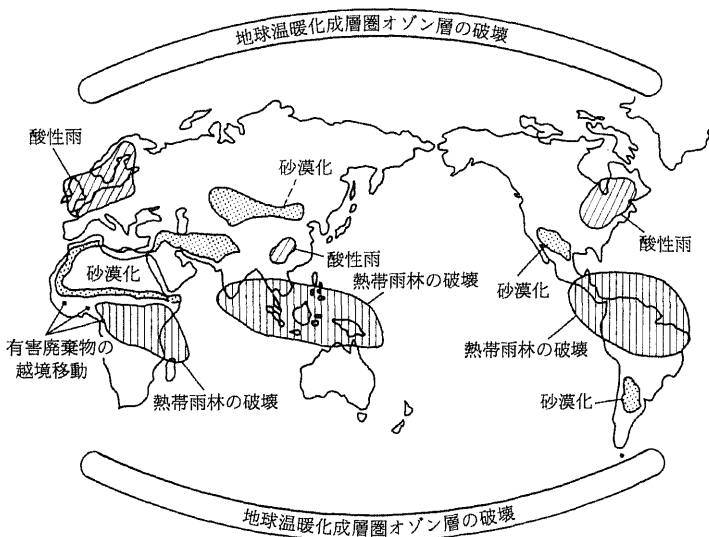
「玉杯」・「象箸」・「錦衣九重」・「高台広室」の贅沢に走った紂王は「酒池肉林（酒は池の如く、肉は林の如くにある）」という贅沢奢侈にふけり権力をかさに暴虐のかぎりをつくした。そのために、ついに周王によって滅ぼされた。殷の滅亡である。

何十万年、あるいは百万年以上の人類の始元の生活が積み重ねられたあと、中国の古代国家、殷（前十五世紀から前十二世紀）で、暴君といわれる紂が奢侈に傾いた時に、紂王のおじにあたる賢人箕子はこのようにいって嘆いた。

「此れに称^{かな}ひて以^{もつと}て求めば、天下も足らざらん」つまり、「天下中の富を集めてみたところで、足りるはずはありはしまし」と。

わずか三千年前に王者について賢者がそれでは滅亡してしまおうと嘆いた生活を今は、いかに技術水準が上昇し

地球環境問題の概要



出所：通商産業省「90年代の産業政策」

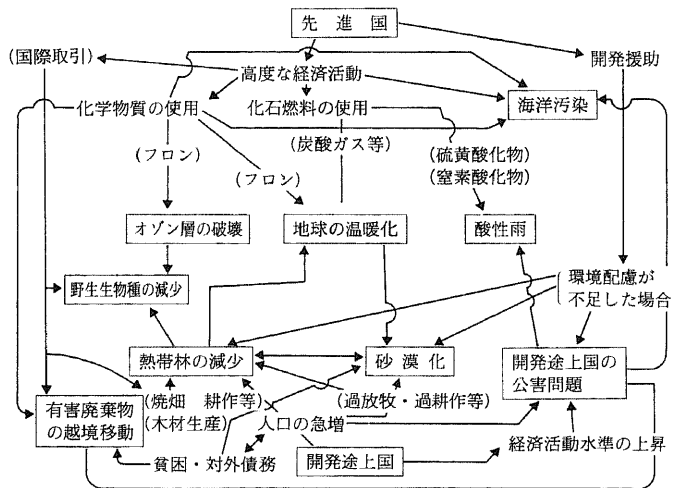
ているとはいえ、何十億（世界人口、五十四億、一九九二年、大古の狩猟採集経済時代には三百万人）という人間がひたすら追いやめてきている。これでは地球の荒廃が心配されるのも無理はない。ちなみに十九世紀にくらべて二十世紀の成長率はグンと高くなっており、人口増も同様なのである。

さて、現代においては人間が経営者が貨幣追求の欲望ロボットと権力ロボットになっており、勤労者については労働ロボット（これを「労働疎外 Entfremdung der Arbeit」という）になっていると云って過言ではない。

この意味では、すべての人が物欲とエゴイズムの奴隷になって「自己疎外」（真の自己自身の喪失）されている。殆どすべての人間が真の自己を発見できず、欲望追求のいわば貧欲の無明の闇の中をさまざましている。

人類はこの状態から脱出せねばならぬ。この自己喪失の貧乏の、黄金欲の、酒池肉林の闇の世界の中からなんとか脱け出さねばならぬ。したがって、人類解放（エマ

「問題群」としての地球環境問題



出所：「環境白書」
 （大和総研『1991年の日本経済』（PHP研究所）参照

ンツイパツイオン」の課題が人類に強くもとめられている。

マルクスやエンゲルス（さらにレーニン）らはかつて資本家支配からの労働者階級の解放を熱烈に訴えた。それがいわゆるマルクス・レーニン主義だといえる。それも一理はあろう。ただし、二十世紀末から二十一世紀以降にかけて、人類の「存亡」がかかるかたちでもとめられているのは、プロレタリアートの解放だけではない。資本家の解放ももとめられている。全人類が真の自我に目覚め、人間としてのあるべき姿を取り戻すことである。個々人が「酒池肉林」の貧婪から自らを解放すべきである。すてきなマイ・カー、マイ・ホーム、ダイヤモンド、真珠・ミンクの毛皮のみを追いもとめる人生から脱け出すことなのだ。すべての先進国・大国も、諸国（指導者や大衆が）もこのような貧欲とエゴイズムの虜になつて相争っている。その状態から脱け出すべきなのだ。

社会科学の前進のために、経済学の前進のために、ここで私達は重要な一步を踏み出そう。

人間とは何か、経済活動をし政治や社会生活をし、都市や機械を造り、スポーツ・娯楽・学問・芸術活動などに携わる人間とは一体何なのか。この本質的な問いつめをせずに、真の前進はありえないのだ。

人間は肉体（身体）をもつという点で、他の動物と同じ（幾分か脳が発達している）生き物なのだろうか。

我々人間は音楽・絵画・彫刻を楽しむ、学問を究め、神を信じ、正義・公正・善を愛し、家族愛・友愛・人類愛をもち、前進向上、生きがいをもとめる。これらの行為とその推進力になっている心情や心は極めて美しくかつ崇高でさえあるのだ。

「愛」をもとめ美に憧れ「正義」をもとめ、向上をめざし、崇高なるものに憧れる心が人間だけに、その内奥に埋め込まれているのは、人間が貝やトカゲと違う大なる特徴だ。

真・善・美・正義・公正にひきつけられる我々の心は、まことにすばらしく人間を他の生物から分ける心性である。その淵源をどこにもとめるか。脳髓にその源をもとめられるだろうか。

この崇高ともいえる心はまことに強く、時に人間が自らの肉体を滅しても何かをもとめようとする心情にまで繋る。これはおそらく他の動物にないことだろう。

殉教や、主君や名譽のために民族を守るために、自分の命を投げうつことを辞さぬ人々さえいる。

この辺の心情・精神の崇高性について、それを究めるのに人々は古来大変な努力をしてきた。ついにながら人類について研究してみると、大古の昔からどこでも、どの種族・民族も神をもとめ、神を嵩める心情をもっていたという事実にゆきあたる。

いずれにせよ、この心性は人間の肉体を超える靈性とでもいうべきものに発すると見るほうが、むしろ説明がつきやすい。この辺の探究を怠るかあるいは曖昧にし、人間をたんなる肉体と見、せいぜい高い知能をもつ動物と見て各種の学問化を唯物主義的におこなったところに、近・現代の経済学・社会学・政治学・法学ひいては歴史学など人文科学などについて、黙視できない限界が認められるのではないだろうか。

④ 経済学の二人の巨人といえるA・スミスもまたマルクスも人間の本性のガイスト（魂や靈性）の側面を故意に無視したといえる。例えばA・スミスの『道徳情操論』の人間本性論はたんなる「利己心・利他心」の論議に目をそらすものであり、その欠陥が二百年余看破されなかった。

すでに述べたように人間学ないし人間観の探究こそが必要であり、このテーマを基本問題に据え直すことから、経済学はもちろんその他の学問の革命も起きるだろう。二十一世紀以降にも通用する学問が興起するだろう。経済学については「神性経済学」とでもいうべきものが、新たに展開されるだろう。本稿はそのテキストとして執筆されているともいえる。

ヒュームやスミス以来の十八・九世紀・二十世紀の経験論ないしは唯物論の経済学には、この辺を直視することを怠ったがゆえに大きな歪みや誤謬があり、この二百年以上の人類は、はなはだしく誤導されてきた。その点のちに詳しく説明しよう。

人間とは身体と魂（スピリット）との二元的な存在とつかむことにしよう。のちに触れるが現代科学の先端知識に従うと、身体をずっと立ち入って探究して行けば素粒子・クォークなど超ミクロの粒子に還元され、その先があるかもしれない。さらに、これらの微粒子はたんなるエネルギーに化してしまうかもしれない。エネルギーは次元の壁を越えるものかもしれない。

他方で、心・精神・靈魂・霊体ともいうべきものは、三次元物質界を越えた別の次元の存在である可能性が大なのだ。近年は「超個心理学」や「共時性」や超能力などが話題になることが多いが、これらの事実にも関わり、それが科学的に説明されつつあるわけだ。この点については古来諸聖人・科学者・宗教などが繰り返し説く努力をしてきた。つまり、人間の五官（眼耳鼻舌身）ではじかに知りえない物質以外の存在があるということを教えている。

当面の主題である経済学についていえば、物質（鉱物・動植物、自然・地球・月・太陽など）のほかの霊性・心性などの存在があるということである。

「われわれ自身は、肉体と魂とからなる存在……」（ソクラテス）

「われわれが肉体をもっているかぎり、そしてわれわれの魂が、肉体的な悪と分かちがたく結合しているかぎり、われわれは、われわれの求めてやまぬあの《真実》を完全に手に入れることは、けつしてできないだろうから。まことに、肉体を養う必要のためにわれわれが背負わなければならぬ、数しれぬ煩わしさは言うにおよばず、おまけに、何か病にでもかかろうものなら、たちまちわれわれの真実の探究は妨げられてしまうのだ。さらには、肉体がわれわれの心に充満させる数々の恋情、欲望、恐怖、はてはありとあらゆる幻想などの、多くの愚かしいものどもを思えば、まことに諺にいわれるごとく、肉体はわれわれに何ひとつ片時も考えることもゆるさないと、まったくそのとおりなのである。戦争も、内乱も、争いも、もとをただせば結局みな、ほかならぬこの肉体とその欲望がひき起こすものではないか。なぜなら、およそすべての戦争は財貨の獲得のために起こるのだが、われわれが獲得しなければならぬのは肉体のためであり、奴隷のように肉体にかしずかねばならぬためなのだから。こうして、これらすべての事柄のために閑暇をうばわれて、われわれは哲学に専心することができなくなる。」（『アイデアと魂』 藤沢令夫 編平凡社）

このソクラテス＝プラトンの言葉の中には、驚ろくべき密度で、人間と社会についての真実が記されている。人間は肉体だけの存在ではない。人間は身体と靈魂（スピリット、*spirit*）の二元的な存在なのだ。人間はみな靈魂（スピリット）を有する存在だ。スピリットは実在するのだ。

人間＝魂と十靈魂

この命題を自覚することで、経済学にも社会科学にも「革命」が起きるのだ。

我々は今後は個人生活でも、社会運営において、スピリットの存在を考慮しつつ進まねばならぬだろう。また、ソクラテスが説くように、われわれのもつまざまな利己的な欲望は、われわれの肉体から発することが多い。そして、それは「肉体的な悪」とでもいうべきものだ。いわく物欲、いわく権力欲、地位欲、性欲、名誉欲。

人間には煩惱ぼんごう（仏教では、百八煩惱・八万四千煩惱があるという）が無数にあり、それは人間の肉体（身体）から発する。ソクラテスはこれを「肉体的な悪」と呼んでいる。

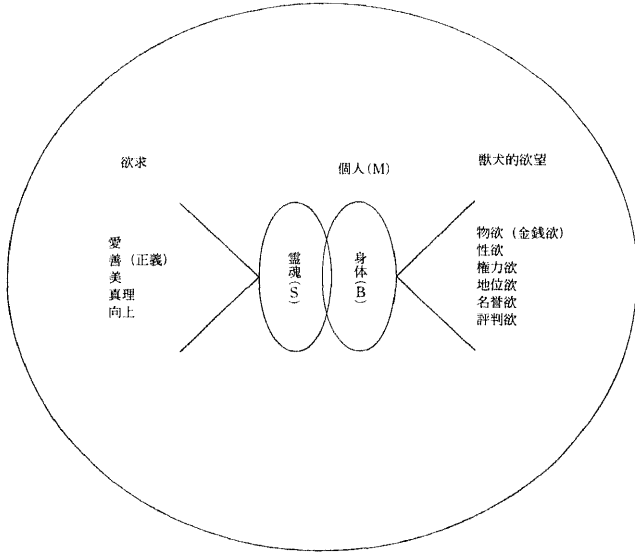
これに対し人間の真・善・美にひかれる心は、その内在の「神性」とでもいうべき靈魂にもとづくのだ。

これをもう少しつめてみよう。人間は他の動物より優れた身体（肉体）をもつだけの一元的存在ではないのだ。人間（M）は身体（B）と靈魂（S）との二元的な（二重の）存在なのだ。またスピリットの面では宇宙・人類すべてが通い合った存在なのだ。各個人がそれぞれみなそうなのだ。これは宗教ではなく、存在論の問題なのだ。ミッドサウ。こうした存在として各個人は思い感じ、もとめ、判断し（意識的かつ潜在意識的にも）行為する。それによって、経済も社会も政治も成り立つ。

マルクスは『資本論』の始元（Anfang）を商品から始め、商品の二面性、使用価値と価値から始めた。アナロジーでいえば、人間は身体（使用価値）と靈魂（価値）との統一物なのである^(註)。

(註) 後者について、「我々の意識の根底には普遍的なるものがある。我々は之に由りて互に相理會し相交通することができる」（西田幾太郎『善の研究』岩波書店）と述べられている。

人間の図式



ここで人間の図式を記しておこう。

人間は二重の存在であり、身体（肉体）からは物欲・性欲・権力欲・地位欲・名誉欲・評判欲などが生じる。そのなんたるかをなかなか自覚しえず、それから脱出できないけれど、これは、ヘーゲルがいう人間の「獣の心と精神的な心」の区別において、前者の「獣の心」にあたり、後者は「精神的な心」にあたるといつてよいだろう。

この人間図式の明確な認識は人間の心理や行為とか社会を知ろうとするさいに決定的に重要だ。ところが現代の社会科学・人間科学では、まだまだこの辺のところをはつきりせず、両者の本質を真に理解せず、ゴチャマゼにして考察していることが多い。

また、各人の生き方や人生の暮らし方、政府・議会・政党・官庁・司法機関・公共団体・銀行・会社・商社・学校・病院・新聞社・書店・テレビ・ラジオ等々の活動においてもそうなのである。ここにすさまじい乱行と混乱と汚濁が生じ、各個も社会も世界もガイストと物質の両面ではなは

だしく汚染され、闇により暗くされている。

現代の経済にしても、政治にしても「精神的な心」によって組み立てられ動かされている面もありはする。だが、近・現代の市民社会が各個の我欲（エゴイズム）を野放しにし、ある意味ではそれを原理にしモーターにしているところがあって、いわばT・ホップスがいう「万人の万人に対する闘争」の社会になっている側面がある。いわば闇の社会になっている。

技術が発展し、財貨が社会にあふれるようになり、その物的な豊かさの前にこの事實は、往々にして見落されがちになっているけれど、人々は真のコミュニケーションを欠きかえって心は孤独で荒れ貧しくなっている。「獣の心」の側面から生じる各種の欲望から、富や地位その他のいわば稀少なものをめぐって万人が争奪合戦を演じることによって、互いが心身両面で傷つけあうことが多い。真に人間的な「精神的な心」は苦しみ、飢餓感が生じる。

この人間と社会の荒涼たる風景と心象を画きあげたものが近・現代の文学・音楽・絵画・彫刻におびただしくあるのはいうまでもない。伝統的社会は市場経済によつて崩され変質し、個人（自我）が明瞭に晰出されてきたけれど、かわつて、奉仕や互酬の精神が失われ、孤独な群衆がおびただしい数生み出された。都市生活も場合によつては農村の心象風景も、そのように変質をとげて行つた。

ロマン・ロランが書いたペートーベン、トルストイ、ミレ、ミケランジェロの伝記に端的に表現されている通り、そのロランをも含めて多数の芸術上の英才はいうまでもなく各個と社会がその本性を見失つてるところから発する、人間の苦悩する心を画き、謳いあげたといえよう。苦悩する心とは、あるいは高きものをうたいあげようとする心とは、人間に内在する「神性」、ここでいうところの魂（スピリット）ないしガイスト（Geist）が存在することに根差す

のである。

ロマン・ロランは、「思想もしくは力によって勝った人々を私は英傑と呼ばない。私が英傑と呼ぶのは心によって偉大であった人々だけである」、「私は善意^{ボンテ}以外には卓越の証拠を認めない」と書いている^註。

^註 以上、新村猛『ロマン・ロラン』(岩波書店)を参照

ロランはさすがに正鵠を云いあてている。数々の芸術が生み出され文化が発展するのは、いうまでもなく、人間に魂(スピリット)があつてその心象を誣いあげたものが公衆の魂に触れ崇高なる感動をまきおこすのだ。近・現代の芸術の多くは神を崇え、自然の美をたたえるものか、「肉体的な悪」ともいえる各種の我欲・エゴイズムや、エゴイズムによる個人と社会の葛藤と荒廃や、この人間性の真実たる魂の相克をえがき出したものが多い。詩人の心象風景、文学者の苦惱(石川啄木など)を想起してほしい。

人間を見る時に、この魂(スピリット)の存在を見落とすと大変な忘れ物をしてしまう。社会を見る時にも同じである^註。

^註 たまたま飛驒への旅行で大原文楽という人形歌舞伎の至芸(一人で百体の人形を繰る)を見た。人形師が心(生命)を込めて繰ることによって、人形はあたかも生きた人間のように動き出す。人間はこの人形のようなものかもしれぬ。

A・スミスは利己心・自我愛 (love for oneself) による利益追求、自由競争が経済生活では社会の調和をもたらすと説いた。スミスは「道徳感情」(moral sentiment) の存在にも触れたが、注意深く読むと、それは人間本性について、利己心の本来性を説くもので、利他心、同感 (sympathy) 仁愛などは政治や社会などの非経済生活において重要で、経済は別だと考えた。別の表現をすれば、経済生活はエゴイズムと物欲中心で良いと主張した。つまり「獣の心」(ヘーゲル) でよいと悪徳を美徳化し理論を体系化した。その真相を知ってか知らずかそれがドグマ化されて、十九世紀の新古典派も同じ事柄を体系化して主張し教化している。「数字と計算機で武装されている」が……ガルブレイスの批判) ここに現代の資本主義経済学ないしは経済観の重大な誤謬がある。

近・現代の社会科学が誤って人間は身体 (肉体ないしは物質) の一元的な存在であるとして切り捨てた根源認識を今こそ想起しよう。あるいは復権させよう。人間は身体だけでなく、スピリットをもち、そのことよってむしろ生命を持つている存在なのだ。

さて、この人間は宇宙・太陽・地球・月などのいわば天地自然との交流によつてのみ生存をゆるさされている。大地に立ち陽光を仰ぎ、大気を吸うことなくして人間は生きられない。

この天地、宇宙・地球について省察しよう。その真の認識を欠いては、真の経済学も、真の社会科学も成り立たない。ところが、在来かつ昨今は、がいて、それを欠いた学問のみが社会に氾濫しており、それらの学問は、真実の半分しか見ないような状態になっているものが多い。

太陽や地球は銀河系の中に位置する。銀河系という星雲の中には太陽のような恒星が一十億もあるという。また宇宙 (cosmos) には、銀河系のような星座が数千億もあるという。

このような巨大な宇宙も百五十億年程前のいわゆるビッグ・バン（大爆発）で始まったとされる。ビッグ・バンの
のち、星雲が出来、星々が誕生したとされる。その詳細は宇宙科学にゆずるとして、ここで我々が問いたくなるのは、
何故ビッグ・バンが起きて宇宙がケシ粒にも足らない（宇宙の種子は一九九二年に発見された）微少なものから膨脹
し、現在も膨脹しつづけているとされる巨大な宇宙（物質界）になったか。宇宙発生の秘密がどこにあるかというこ
とである。

ビッグ・バンを生じたのは巨大なエネルギーによるとされるが、そのエネルギーとは何か。興味は尽きない。とも
かく、ある種のエネルギーが働いて物質の容れ物ともいえる宇宙（コスモス）が発生したということで、宇宙・自然
(Nature)が何かを探究していくと、その巨大なるものの源泉はごくごく微少なものになり、ある種のエネルギーの
ようなものから発現すると解される。

物質とは何かを逆方向で探究していくと、鉱物も、我々の身体も分子↓原子↓素粒子（ニュートロン、陽子・反陽
子・クォークなど）などと、どんどん微細なものに還元されていく。この先、もつと微細なるものに還元されぬとい
う保証はない。

物質（鉱物や身体など）とは何かを考えると、結局はある種のエネルギーがあるということと、無数のものの
あいだにある種の関係づけ、構造や組織・秩序があるということに気付く。これは物理学・化学・生物学などの成果
からそういえる。

こうして自然・物質とは何かを探っていくと、宇宙論（マクロの世界）のほうへ進んでも、微少なミクロの世界の
ほうに進んでも、結果は似たようなことになる。非常に面白いし、また不思議な気持ちもする。このような知識はも

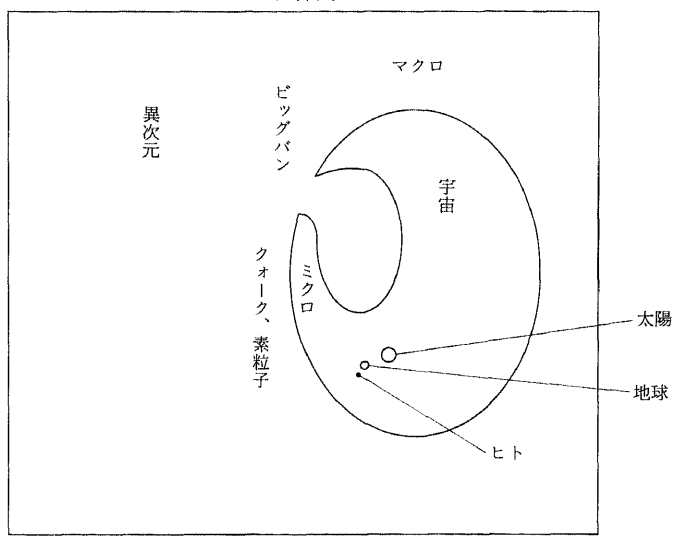
ちろん二十世紀の科学研究がもたらしたもので、我々が二十一世紀に向かってなにごとかを考えようとするなら、人文・社会のことにせよ、この知識を忘れては語れない。

もちろん真の科学研究はこのことを意識せずに進めることはできない。反復することになるが、近・現代の経済学や社会科学、つまり人間についての学理が、上述の宇宙・物質論を不問に付して行われていることは、現代の大きな悲劇である。人類がつねにこのことを念頭に入れて日々思い、行為するようになっていないことは、物質世界での鎖国政策である。

そしてすでに、人間・人類・社会がそのように単純で、いわばバーバラスな営みかたをゆるされないところまで、現代の文明は来ている。

われわれにとって、自然と見え、物質と見え、肉体（身体）と見えるものは、結局ある種のエネルギーと設計と関係づけられ、組織・構造さらには秩序ということに帰着するといつてよからう。「宇宙の存在… 単一の統一性と

世界図



無数の均衡作用」(バーバラ・ウォード『かけがえのない地球』日本総合出版機構参照)。

ミクロの世界を探究するにせよ、マクロの世界、銀河系や宇宙を探究するにせよ、驚ろくべき設計と秩序とハーモニーからこの世界は成り立っているといえようか。

この先、さらに科学的研究が進行するだろうが、このような悟性・五官(感覚)を通して実在するものは何かを探究する人間のアート(技芸)が明らかにするものは何か。結局はますます、ある種のエネルギーと力さらには知慧が存在するという確信を強めて行く結果になるだろう。つまり秩序が無秩序に分解するようでありながら結局はある種の秩序にゆきつく。

この辺のところ、宇宙・世界・無機質・有機物・存在のすべてが辿りつく先になりそうである。現代の物質文明におぼれている私共人類も(米英日独などウォーラーシュテインがいういわゆるセンターへ中心)からこの流れが放散される)、このことの認識を日常の生き方の根底に据えることから始めねばならぬ。このことを自覚することが、日々の楽しみ・快楽をもとめる生き方にとって当座いかにつらく、時に不都合ではあっても、また日々快楽や富や権力の追求に身をゆだねて過ぎたいという、いわば名利みよりのむなほを貧ひんりもとめる「獣の心」の束縛がいかに強かろうと、吾々が獣ではなく真の人間でありたいなら、これを認めるしかない。

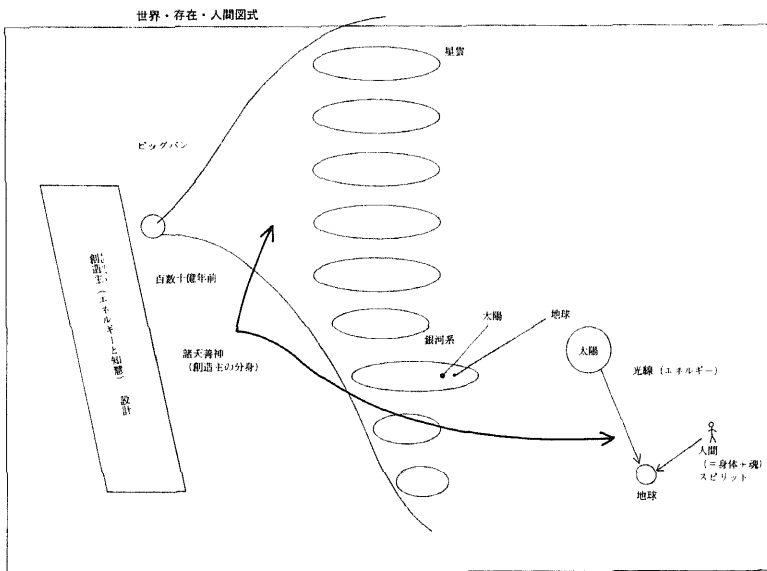
この宇宙に世界にありとあらゆるものは、結局は巨大なるエネルギーと知慧によって生み出されているものなのだ。

(註) これは『聖書』をはじめ、無数のところで熱烈に語られている。一例をあげると「全宇宙を動かしている偉大な力」(芹沢光治良『神

いかにハイテク技術・自動車・航空機・宇宙ロケット、巨大高層ビルディングという現代のピラミッドが作られている社会でも、その大枠になんら変りはないのだ。ここで、世界と存在の図式を示しておこう。

—このような理解をさらに進めて行くと、この宇宙・太陽・地球・人間などすべては、なんらかの巨大な力によって生み出されたものではないかと思えてくる。あるいはこれらすべてのものは、ある種の設計によって創り出されかつ法則・秩序によって動かされているとみなせる可能性大といえるだろう。この世界・宇宙・物質界とは次元が異なる存在があり、その高次元のものによって、これらの物質界は生み出される。

この高次元世界は三次元(物質世界)とある意味で交叉、重畳している。創造主あるいはその派生体(分光)ともいえる各次元のスピリットは無数にあり、これがよく神霊な



いし心靈といわれる。各個人の靈魂（スピリット）は物質世界の創出と同じで、この大いなる存在からの湧出派生体である可能性大なのだ。究極の巨大存在ともいえるものから無数の小さな相似形が生み出される。それは丁度噴水から無数の水粒が現われるようだ。太陽から無数の光の粒が放出されるのと同じようなものだ。筆者は生まれてよりこの方、五十年の思索・研究・無数の体験をつうじて漸くこの認識に達したといつてよい。数々の吟味・検証をおこなってきた。ある意味ではかなりの迂路―経験主義・実証主義―を通つたともいえるが、これもまた仕方なかつたと感じてゐる。

すべてを疑うという精神に徹してきた者（これは「哲学」の精神でもある）がこのような結論に到達したのは、それなりきの意味があつたのかなと、近年、改めて思いもする。

宇宙も諸物象もヒトも究極の実在から放出され生じたものである。我々、一人ひとりもそのように作り出されたものであり、いわば被造物である。究極の実在とは、ヘーゲルがいう「真実在」、「実体」（Substanz）であり「絶対精神」であり、神（God）であるといつてもよいだろう。

究極の実在とは何であるか、宇宙とは何であるか、太陽・地球とは何であるか。また人間とは何であるか。これらの問いに対する答え、つまり「宇宙論・存在論、世界観」がこれからの経済学、社会諸科学・人間学にはどうしてもなければいけない。自然科学にもその大いなる眼まなこがなければならぬだろう。

近年の思想潮流は人類がこれまで開発してきた科学と哲学と学問と宗教と思想とが合一しつゝあることを示す。

近代における経験主義・唯物主義・科学主義はゆるやかな弧を描いてこの一点に集中しつゝある。宇宙時代・サイエンスの時代に唯物主義とエゴイズムの刃で人類と地球が切り刻まれて、人類の在亡が問われる状態になつてゐる今、

このような世界観・存在観が急速に浮上しつつある。なんとも皮肉なめぐりあわせではあるが、それは人類の救済という一点に絞られた宇宙的規模での運動の成果なのだろうか。

第七章 人間の社会と歴史……世界観の革新

大宇宙・太陽系、太陽・地球と月、これらは大いなる知慧とエネルギーによつて創造され、地球に生命圏が作られ生態系が作られて、ヒト（人間）はその中に生み落された。何百数十億年といわれる地球の歴史の中で、ヒトの歴史はかなり短く百数十万年位前といわれる。

歴史時代といわれるものは、さらに短く僅かに数千年にも達しない^脚。

^脚 日本列島では、この二千年間弱のいわゆる歴史時代のいわば表皮部分を別にして、おそらく原日本人が十何万年かにわたり生活をしており、特有の文化を形成していたと推定される。（各種の文献資料による）

先歴史時代の様子は人類学・考古学・民俗学・歴史学や文化人類学によつて研究されてきた。それによると、おおむね次のようにいえる。

ヒトはおおむね、社会を作り、集団生活をしてきた。その中には社会・政治・経済・文化などのさまざまな要素が含まれており、伝承・慣行・規範や協力関係などによつて社会生活が維持されてきた。社会生活で、言葉をはじめとする各種のコミュニケーションが重要な役割を演じることはすでに述べた。火の利用、木製の道具、石器・土器、弓・

槍その他各種の道具も作られ利用された。つまり、今日の人類の社会生活の諸要素は未発達なものが多かったにせよ、大体先史時代からあったといえる。特筆に値することは、この時代に殆どすべての民族が宗教、神に対する信仰をもっていたことである。また、殆どが創造神話ないし始祖神話にあたるものをもっており、太陽・山川草木・動物・植物等のすべてについてスピリット（神靈）が宿っていると信じられていた場合が多い。

すでに述べたように、これは人間がこの段階で無知だったからではない。むしろそう信じさせる理由があったので、強くそう思われたのである。宇宙・世界・存在の理法を反映してそう思われていたということ、必ずしも、これまで誤解されがちであったように未開で野蛮だったからではない。むしろ、真実在・神・スピリットの存在を實質上忘れがちで、毎日を暮らしている現代人ないしは現代社会が幼稚な唯物主義で、かなり倒錯した無知で野蛮な社会だとさえいえよう。

現代人の墮落については、シェリングの次の言葉を引いておくことにしよう。

「かくして罪の初めは、人間が、自身創造する根底となろうとして、また自己のうちに有する中心の力をもって万物に君臨しようとして、本来の有より非有へ、真理より虚偽へ、光より闇へ踏み入ることである……。」（「人間的自由の本質」、『世界の名著』43中央公論社四六七頁）^(脚)

(脚) 人間は自らが「神の恩寵の光に照らされて生きる」こと（トインビー）をとかく忘れがちになる。

さて、いわゆる「文明」は多くは人間が農業や牧畜を始めたことと結びつくといわれる。採集・狩猟(gathering hunting)・

魚獲にあわせて生活が安定し、生産物も増え人口も増加したのである。これとともに生活をまかなうのに必要な量以上の、食料・衣料・器物・機具などいわゆる生産物余剰 (surplus product) が生みだされるようになった。それが、発展の支えになり、住居もしだいに良くなり、村落や都市が成立するようになる。これと結んで商業も盛んになる。ナイル河の流域やチグリス・ユーフラテス河流域の文明、黄河、揚子江流域の古代中国の文明などは、こうして興ったのだらう。

農耕を営むのに必要な水利の便に恵まれたところや交通の要衝が、まず栄え人口も稠密になり富も集中した。

そこに領土を持ち、主権をもつ国家が生まれた。農業・手工業・商業の発展と政治の本格化や文化・芸術の興隆が見られた。産業の発達と国家の成立にともなう規模の利益が人類史上の大きな画期となった。いわゆる歴史時代（文字に書かれた記録がある）がここに始まった。

古代王朝や古代エジプト、ローマ、中国、印度の帝国その他を軸にする文明の興隆は、政治・経済・文化などの各種の要素の複合作用の結果だったように見える。特に国家の成立が社会の規模を大きくし、それらの社会の交流と対立が歴史をダイナミックに動かしたといえよう。いずれにせよ、この時期以降、政治・経済・文化・宗教などの諸側面で目立った変化が起きたことは事実である。

史的唯物論は生産力（いわば経済）の発展を軸に文明の興隆を説明しようとする。農業・牧畜業・手工業・商業の発展がいちじるしく、それが大きな規定力をもったことは認められるにせよ、同時に政治（国家）や宗教や文化のことも規制力が大きかったことも否定できない。前に述べたように、筆者は多元的・複合的な歴史観をとるのが妥当だと思ふ。

(脚) 筆者の歴史観については、「史的唯物論の適合性」(脚)(続編)『筑波大学経済学論集』十二、十三、十四、十七、二十号)

ところでヨーロッパや日本のいわゆる中世封建社会においては、政治経済両面がミックスする封建制度が成立した。政治においては、国王と諸侯のあいだに古代的君主制に比すと分権化が進んだといえる。経済的には諸侯や君主の土地所有権と人身支配権によって、いわゆる封建地代(労役による労働地代・貢納による生産物地代・貨幣地代)が支配者によって、被支配者(農民…いわゆる農奴^{serf})から徴収された。

農民はまた農村共同体のメンバーである限りで耕作権があり、牧草地や山林などの共有地の利用権が認められたのだという。

都市にあつては、都市の自治権の範囲で、手工業者や商人のギルド(同業組合^{guild})と構成員の親方(master)や職人(journeyman)・徒弟(apprenticeship)の関係などが注目される。

ついでながら、古代ないしはいわゆる東洋の君主制においては、^(脚)政治的には君主専制・中央集権的な官僚制支配が見られ、経済的にはその専制に服するかたちの労役や貢納が農民やその他手工業者・商人によってなされていたといえるだろう。いわゆる奴隷制によって心身ともに拘束された奴隷が用役に服し、耕し、手芸品を作り、土木事業に従事し、ピラミッドを作っていた事実もある。

(脚) 我が国では原日本人の永い永い生活のあとで諸国家が成立し、比較的最近に大陸から渡来したと思われる部族が征覇し国家を作った

のであろう。(各種文献や報道による)

ただし君主による中央集権的な政治制度と経済的な奴隷制度とは即同一ではない。経済的には自作農がいたことも多いし、地主―小作人関係があつたところもある。ローマのラティフンディウムのように、貴族などの大地主が大農場経営をおこなつていたところもある。

一般論として政治制度と経済制度の組み合わせは多様でありうる。中央集権制の国家でも、経済的にはいろいろな類型があるし、古代でも共同利益のための王制や、中国の堯帝、舜帝、夏の禹王などのような徳治主義の政治もあつたといえよう。

中央集権的な王制は古代エジプトなど古代の専売特許ではなく、中国・インド・中東地域などでは近世に至るまで君主制が継続したところが多い。国家が誕生したのち、目立つところでは、大部分の場所で中央集権制の王制が成立し、当然に階級の分化も進む。政治的にも経済的にも階級・階層の分化とその固定化が進む。その場合でも農民など一般庶民の間では、村落・親族などの共同体は生活の単位として重要な役割を演じることが多い。つまり国家成立以前の共同体の原型は残されながら、タテの階層関係がせり上がり、組織化される、トップに立つ者や家系や民族が代わることがあつても、本源的な社会集団が社会の母体になっていることが多い。言葉をかえると、先歴史時代のいわば始元の社会構造が、その後の時代まで若干形を変えながらも残ることが多い。

ついでに記すと、アフリカ、アメリカ、オーストラリア、ミクロネシアなどの広い地域では、王制や封建制など国家といわれる色彩の強いものが成立しないまま始元ないしは原初の状態に近い形の社会状態が、ずっと続いたところ

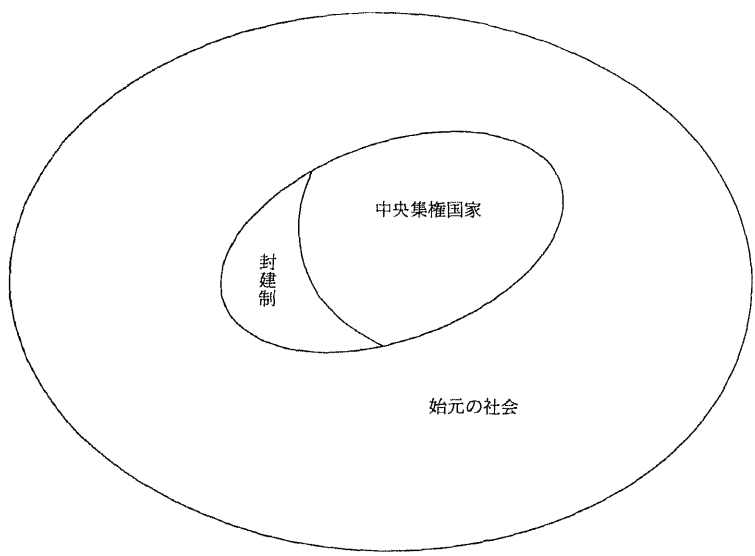
があるといつてよいようである。これに対して、アジアや中東やローマでは中央集権的な君主制ないしは王制が成立し、王朝の交代その他はあるにせよ、それが永く続いた。専制君主制や身分制度の固定化は社会の流動化をくいともめる強い力があり、商業なども許認可制の下で初めてなされるケースが多かった。

それだけにこれまでの政治や経済のあり方でゆるされる範囲を超えて、貨殖術(アリストテレスの Khrematistike)つまり金貸や商業などの不自然な財貨の取得法を繰り広げるには困難がつきまとった。交換や貨殖術(商業や金貸)が限度を超えると、これまでの共同体社会や政治・経済制度の社会的秩序を崩すおそれがある。そのために貨殖術(いわばM・ウェーバーの賤民資本主義)は社会通念によって忌避され、軽蔑され、封じ込められてきた。

貨幣とは何かの探究に驚くほどのエネルギーを費したマルクスは、次のように記している。

「貨幣はそれ自身商品であり、だれの私有物でもなれる

世界の重層的構造



外的な物である。こうして、社会的な力が個人の個人的な力になるのである。それだからこそ、古代社会は貨幣をその経済的および道徳的秩序の破壊者として非難するのである^{脚)}。すでにその幼年期にプルトンの髪をつかんで地中から引きずり出した近代社会は、黄金の聖杯をその固有の生活原理の光り輝く化身としてたたえるのである」(『資本論』)

①大月書店一七二頁

脚) 「まったく、世のきまりになったものにも、黄金ほど人間にとつて禍いなしなものはない。国は攻め取られ、男どもは家から追い立てられる。また往々にしてまともな心を迷わせ、恥ずべき所業へと向かわせる。それは人々に奸智にたけた厚かましさを、いかな悪業にも恥じない不敬な業を教えこむのだ。」(ソフォクレス『アンティゴネ』(筑摩書房『世界文学体系』版、第二巻、呉訳、八七ページ) マルクスは前記引用文にこの注をつけている)。

現代の経済システムは資本主義制度といつてよいが、これは人々が貨幣を神と崇める「貨殖術」(貨幣に子供を生ませる)が基軸になった大変に奇異な経済システムといえる。この点のちに詳しく述べるとして、貨殖術が広範に広がるようになったのには、中世のヨーロッパがかなり分権的な封建社会になっており、そのうえに、十一世紀に始まった十字軍による疲弊や中世末期のペストの大流行や農民一揆などで、階層的支配や共同体的な秩序が崩れ始めたことなどさまざまな原因があるのだろう^{脚)}。

脚) 秦玄龍『一般ヨーロッパ経済史』法政大学出版社その他多数を参照。

マックス・ウェーバーは有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で、近代資本主義の成立と宗教的倫理(エートス)

との繋りがあるとした。その資本主義が倫理感と非常にかけ離れた唯物主義とエゴイズムの心と結びつくことになったのは、皮肉な結果である。

人類の歴史でおそらく百数十万年続いたと思われる、いわゆる始元・未開の社会は、これまで不当に貶められてきたきらいがある。それはむしろ、きわめて注目し値する文明の時代、「始元の社会」というべきであろう。

そこではメンバーが互いに一つのものにつながるというアイデンティティーの意識があり、力を合わせて生きるということ、つまり奉仕と返礼、互酬つまり協力を原理にして、社会集団・共同体単位の生活、いわゆる共同体(community、Gemeinschaft)単位の生活を営んでいた。個々人が生まれて気付いた時には共同体(家族・種族・部族など)があった。また、相互奉仕を軸に共同体単位の生活をする事で、個々の生活も保障されるという暗黙ないしは公然のエートス・意識があったといつてよいだろう。

現代の個人主義社会のように、各個人がすべて自分の責任で生きねばならぬという傾向はあまりなかった。その反面、共同体・全体を離れた個人の認知と自覚(我の自覚、I・it)もあまりなく、したがって個人の人格(Personlichkeit)・個性や自由・自律の自覚・社会的認知・尊重は薄かったろう。F・テンニースがいう、ゲマインシャフト(Gemeinschaft)だった。(『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(上)(下)岩波書店)。これに対して、近・現代の社会はゲゼルシャフト(Gesellschaft)つまり各個人の契約・約束をもとに成立する集合体としてある社会だといわれる^脚。

脚 個人と社会(全体)との関係がどうであるかは、社会学においてはもちろん、社会科学全体にとっても古くして新しい大問題である。

ついでにいえば、個人の人格の尊重の自覚も大切だし社会生活・共同体・各種組織の営みも大切だ。共同体だけが上だとか、個人だけが社会よりは上だというものはなからう。部分と全体は互いに浸透しあい、従属しかつ自由であるというホロン思想が示唆するところが多い。